



久保田 信

39

イラモ



イラモと聞くと、何かの海藻類と思うだろうがクラゲ世代がある。画像は野外から拾ったに捕れないイラモのクラゲだ。田辺湾でプラシクト

ンネットをひいて偶然入った。

イラモは海底で着生生活をするポリプが目立つ鉢クラゲの一種。うっかり触れてもすると無数の刺胞が発射され、激痛が走り、その後は腫れ上がってみみず腫れになる。もっとひどい症状になる場合もある。注意が必要だ。

イラモが世界に知られたのは、京都大学瀬戸臨海実験所の始まりのころにさかのぼる。1936年、初代所長の駒井卓先生が新種として記載された。今でも実験所年報のロゴマークとして使われている。

田辺湾やその周辺にはイラモが多数生息している。人の握り拳くらいの大きさになるので肉眼でも見つけやすい。

イラモは浅い海底で附着生活を送るが、最

初1個だった小さな個虫という単位から出芽方式による無性生殖を繰り返して、あちこちから芽を出して、それらがつながったまま離れず大きくなる。しかも体の外にキチン質の鞘(さや)をつくり、柔らかい体を保護する独特の構造をしている。

不思議な特徴がもう一つある。それはこの画像のクラゲだ。傘径は1ミリ足らずで鉢クラゲ類の中では例外的に小さい。このためポリプの姿から名前が付けられている。傘はコスモスの花のようだ。8枚の花びらのような構造で、8個の感覚器もあるが、画像では縮んでいる。

雌雄は別で、雌は小さな体ですぐに卵を産み、雄は精子をいっぱい海中に放出する。子孫であるプラヌラをつくるためだ。親クラゲは餌もまったく取らず、有性生殖の役割を終えると、すぐに死んでしまふ。寿命はとても短く、雄はポリプから海中に遊離することさえない。

(京都大学准教授)